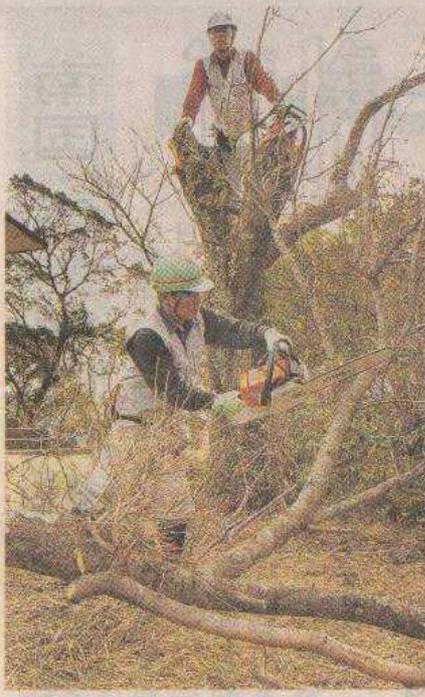


(第3種郵便物認可)

地域ワイド

テングス病の桜120本伐採

高知市の筆山公園 樵塾会員ら10人奉仕



テングス病にかかった桜を伐採する森林ボランティア「四万十樵塾」のメンバー (高知市の筆山公園)

よみがえれ、桜の名所。森林間伐ボランティア「四万十樵(きこり)塾」のメンバーら約十人が二十二日、高知市の筆山公園で、桜の天敵、テングス病にかかったソメイヨシノ約百二十本の伐採作業を行った。

樵塾は官民一体で流域振興に取り組む「四万十川財団」が企画した「樵養成塾」の修了生が、十

四年に設立。高知市を中心約二十人の会員がおり、月一回のペースで四万十川流域の森林を間伐している。

テングス病は桜の中で最もソメイヨシノが特にかかりやすく、幹からてんぐの鼻のように出てきた枝がクモの巣のように密生。花が咲かなくなる上、ほかの木にも次々に伝染する。昨年の日本樹

木医学会支部の調査では、沿道や山頂付近の七百三十三本のうち被害がないのはわずか5%。55%は剪定(せんでい)などの処置が必要で、残る40%は伐採処分が望ましいとされていた。

今回は会員の技術向上も兼ねて同市に伐採を申し入れたため、伐採対象の約三百本のうち、広場など比較的安全な場所での作業となった。二日間かけて伐採予定だったが、メンバーは目印の黄色のペンキの付いた木を手際よく切り倒し、作業は午前中で終了。山頂からの眺めをささぎって

た竹も切るなど景観整備にも協力した。

樵塾副代表の松岡正宣さん(五八)は「筆山公園は昔、よく娘と花見に来た思い出の場所。三歳と七歳になる孫が成人したころに、満開の桜を家族そろって見に来れるようになれば」と話していた。

同市は今後、病気に侵された枝の剪定や治療、病気に強い品種への植え替えなどを行う方針。